埼玉学園大学・川口短期大学　機関リポジトリ

Modern Culture in Saitama prefecture : development of the children's Ishi Momoko's work

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-08-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 河野, 基樹 メールアドレス: 所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/992

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

埼玉の近代文化
―児童文学における展開・石井桃子―

河野基樹

1　埼玉の文化・文学

埼玉の　津に居る船の　風を疾み　綱は絶ゆとも　言な絶えそね

「万葉集」巻第十四、東歌、武蔵国相聞往来歌九首のうち三三八〇番歌。「埼玉の船着場に繋がれた舟が、風の勢いが増してその舫綱が切れることはあっても、手紙を寄越すことは止めないでおくれ」の意[註1]か。埼玉は、幸魂に通ず。唱えれば言霊となりて、武蔵の大地の豊穣を約そうか。これに擬えば、埼玉の文化の豊かな稔りも保証されているといえよう。

詩魂のこの故里は確かに、諷詠詩人を迎えるに相応しい美しい田園が広がり、好事の人士を育むに絶好の地であった。埼玉の近代文学はまず、短詩型文学に始まる。太田玉茗は、〈明治〉期の埼玉の近代詩を一身に負うかの観がある。〈大正〉期には、「日本民謡」を主宰した霜田史光、「明星」の中期を支えた平野万里、〈昭和〉期には、自伝「詩人の運命」の岡本潤が知られる。

活発な詩壇、歌俳壇、所謂韻文の盛況に比して、散文に関しては、その栄華の時は長く待たれていた。埼玉を舞台とする著名作品は、田山花袋「田舎教師」に極まる。さらに、埼玉人にとっての誇りは、森鷗外の「青年」に大宮公園が現われることにあり、そののち、佐藤紅緑の少年小説「あゝ玉杯に花うけて」が唯一気を吐いていたことにあった。

2　埼玉の小説

近代埼玉の文学・文学者を網羅的に紹介することに関しては、『埼玉現代文学事典』[註2]が好個の資料である。同書は見返しに、「埼玉の現代文学地図」を付す。文学者の在住地（誕生・一時在住を含む）、来訪・執筆の地、作品（作品に描かれた地）、文学碑（作家・作品）の別に、幾多の項目が盛りこまれている。埼玉の近代文学は、おもむろに進展・充実していたのであった。埼玉ゆかりの小説家を改めて大観しておきたい。

①　埼玉出身者：埼玉出身の大衆小説家として、「雪之丞変化」（一九三五年）の三上於菟吉がいる。行動主義文学の作家で、「仮面天使」（四八年）の豊田三郎。「山村の女達」（三九年）の大谷藤子。新歌舞伎作者で「巷談宵宮雨」（三五年）の宇野信夫。

三上は庄和町、豊田は草加市、大谷は両神村、宇野は本庄市の出身。「罪に立つ」（二二年）の細田源吉は川越である。

② 時代が下っての埼玉出身者：年代順に挙げる。芥川賞候補作「般若」（三八年）の秋山正香（あきやままさか）。「時雨の鷹」（五二年）の沙羅双樹（さらそうじゅ）。芥川賞候補作品で、映画化された「夜の河」（五二年）、「小説川端康成」（七三年）の沢野久雄。「青春万歳」（五七年）の宮崎博史。秋山は行田、沙羅は越ヶ谷、沢野と宮崎は浦和。

③埼玉出身ではないが、埼玉に縁（ゆかり）の作家、④埼玉を題材に取った作品とその作者、のいずれも枚挙いとまない。

3 埼玉の児童文学 ―― 童話・少年少女小説を中心として

埼玉の地においてこれまで模索され、展開されてきた児童文学の分野は、実は豊穣な歴史を刻んできたのではなかったか。

埼玉児童文学の草創、その中でも散文の分野は、北川千代にその一つの源流を辿ることができる。出身は深谷。その業績を記念し、日本児童文学者協会により、一九六九年、「北川千代賞」が創設された。

旧制・浦和中学の生徒と、町の勤労少年との義侠を描いたのが、「あゝ玉杯に花うけて」（二八年）。少年野球をテーマに、立身出世を説くこの小説の作者は、佐藤紅緑。同作品は、埼玉のみならず、全国の少年の絶大な支持を受けた。この成功を受け、紅緑はその後も、雑誌「少年倶楽部」に拠って少年少女小説を書き続け、大日本雄弁会講談社の文化、すなわち、戦前・中の大衆児童文化を牽引した。

早船（はやふね）ちよ「キューポラのある街」（六一年）は、鋳物の町・川口を舞台に繰り広げられる青春譜。青少年の成長小説であるのと同時に、労働の町を舞台とすることから、背景には、労働問題のテーマも盛り込まれている。早船は、川口、のち浦和に長く住す。早船の配偶者・井野川潔（いのかわきよし）は、川口出身の教育者であり、早船とともに、児童文学理論誌にして実作を多く掲載することで知られる「子ども世界」（児童文化の会）の刊行者でもあった。

埼玉の西部地域には、東松山での小学生時代を回想した「天の園」（七二年）で知られる内木村治がいる。

右の児童文学者たちから見れば、さらにあとの世代を代表するのが大石真（おおいしまこと）である。作品「チョコレート戦争」（六五年）で広く知られる。和光市の生まれ。遺作となった「眠れない子」（九〇年）は、第二八回野間児童文芸賞を受賞した。

石井桃子、埼玉のみならず日本をも代表するこの児童文学者は、浦和の出身である。石井は、日本児童文学の理論的研究の第一人者であり、作品「ノンちゃん雲に乗る」（四七年）の作者として極めて著名である。

埼玉の児童文学の現在はそれではどのような動向にあるのか。秩父出身の児童文学者・市川栄一は、「日本児童文学」（九三年四月号別冊）に、埼玉の児童文学を大観した「埼玉」を寄稿、埼玉県在住の児童文学者は、現在八〇名を超えていると述べている。

4 児童文学

「児童文化」、子どもに供される《文化財》と一般に規定される、を上位概念とする「児童文学」は、子どもを対象に創作された文学の総称である。但し、この語が含む概念は多義的である。

○ 学術・専門的用語としての児童文学：Juvénile littérature

○　子どものための文学 ： Literature for children
○　日常用語としての子どもの文学 ： Children's literature[註3]

児童文学は如何に定義されるべきか、という素朴な問いは、文学、あるいは芸術は人類にとって一体どのような意味を持つのかという古来よりの疑問と同様に、未来永劫に続く思索を要請する。児童文学の関係者に、等しく持ち分たれるべき切実な課題として、この事柄、すなわち児童文学の本質・機能・効用に関する再検討の必要性が自覚されたのは、歴史的には、一九六〇年前後のことであった。それは、児童文学史的には、前代の児童文学を色濃く規定していた小川未明文学の伝統、それを如何に克服すべきかという問題として現われた。

石井桃子を中心とする児童文学研究グループの小川未明批判の実際、また、『現代児童文学論』[註4]（五九年）所収の「さよなら未明」において古田足日（ふるたたるひ）が行った歴史総括がその具体的あらわれである。これに加えて、〝児童文学、そしてまた一般文学を評価するに当って、果たしてその基準は同一であるべきか否か〟という、高山毅と国分一太郎との間に五八年前後に交わされた論争も同機軸のムーブメントである。高山は、評価基準をただ一つと考え、児童文学の特殊性を重視する国分はそれぞれ別との見解に立った。

石井グループからはもう一つ、〝児童文学創作の最重要の要件は、内容の明快性と興味深さにある〟との提唱が併せ行われた。「分りやすさ」と「おもしろさ」とが、児童文学の必要にして十分条件を構成するとの主張であった。

5　日本の児童文学の革新と石井桃子

児童文学理論の新たな構築を目的とする石井の研究・啓蒙は、海外の児童図書館の見学から帰国した石井自身を中心に、いぬいとみこ・鈴木普一・瀬田貞二・松居直・渡辺茂男をメンバーとして行われた。五年間に亙るその共同研究の成果は、『子どもと文学』[註5]（一九六〇年）の刊行という形で結実する。

「子どもと文学」は、前出の古田足日「さよなら未明」、さらに、佐藤忠男「少年の理想主義について」[註6]（五九年）とともに、結果的に、児童文学革新の一翼を荷うことになった。いずれも、五九年と六〇年の所産である。日本の児童文学の〈現代史〉は、一九五九年に始まったとされる所以である。

「子どもと文学」は、内容の上から二部構成で編集されている。第Ⅰ部は、各論（作品・作家論）、第Ⅱ部は、総論（理論篇）。

第Ⅰ部は、「もやもやした世界に分けいっていくようで」「説明のしようもない」[註7]日本児童文学を捉え直したいとの意図から出発し、日本の児童文学を代表する六人の作家を取り上げて検討する。小川未明・浜田広介・坪田譲治・宮澤賢治・千葉省三・新美南吉の六人がその対象である。六人の内、前者三人が否定的評価を受けた。

小川未明は、児童文学を標榜しながら、肝心の〈子ども〉を疎外し、〈子ども〉不在の〈童心主義〉を嚮導したことが論難された。浜田広介は、作品のテーマ、情景・心理描写とも、それを取り上げ描写する蓋然性が見当たらないということで否定された。

坪田譲治は、〈子ども〉を扱いながら、それが大人のための作品となっている、と批判された。特に、〈生活童話〉なるイレギュラーな

方法を編み出したことに批判は集中した。〈生活童話〉のもともとのルーツはどこにあるか。それは、プロレタリア児童文学である。鳥越信によれば、生活童話は、〝日常〟に材を取り、〝貧しさ、労働、連帯、集団〟といった素材・テーマを選ぶ。生活童話の中心概念は、〝生活主義〟と〝集団主義〟にある。これは、思想統制の時代を背景に、〝社会主義・党派性・階級闘争〟などの言葉を置き換えたものである。[註8] これら思想転向の表象を含め、石井らにとって、思想の臭いのするものは、忌避の対象であるのだ。

肯定的な評価を受けたのは、賢治、省三、南吉の三人である。宮澤賢治は、作品の構成、描写、ユーモアの質、その全てに亙って及第点が与えられ、「真実」の裏付けを伴ったファンタジーであるとして高い評価を受けた。千葉省三は、日本児童文学史上最高の「水準」をもって「生き生きとした子ども」を描いたという点で、新美南吉は、そのストーリー性重視の姿勢と、それが作品中に横溢しているということで評価を受けた。

第Ⅱ部では、第Ⅰ部で用いられた評価基準そのものについての詳解が行われている。基準としてまず、「ストーリー性が一番に大切である」とされた。次いで、その基準を満たしている「昔話（の話形）こそ児童文学の手本」であるとされた。さらに、同グループの総意は、縷説される、〈児童文学にイデオロギーは不用である〉とのテーゼにある。時の変遷によって、評価の揺れる所謂イデオロギーというものは、日本でも、プロレタリア児童文学という展開を見せたことがあったにせよ、それをテーマにすることは、「作品の古典的価値（時代の変遷にかかわらずかわらぬ価値）」を損ない、また、「人生経験の浅い、幼い子どもたちにとって意味のないこと」とするのである。人口に膾炙することになったこのテーゼは、日本人の嗜好にもともと馴染むところがあったためか、あるいは時代的社会背景もそれに助勢したためか、広く一般の支持を得て実践に移され、多くの実作を残すことになった。その最も模範的な作家が、中川李枝子であり、模範例が、「いやいやえん」（六二年）「ぐりとぐら」（六三年）などの作品である。翻訳の分野でも、この規範に当てはまる作品が次々と紹介されていった。絵本では、ガーグ（Gág, Wanda）「一〇〇まんびきのねこ」（石井桃子 訳）、クレール・ビショップの「シナの五にんきょうだい」（石井 訳）が、幼年文学では、ガーネットの「エルマーの冒険」（渡辺茂男 訳）が翻訳された。

6　石井桃子の文業　――編集者・翻訳家・理論家・児童文学啓蒙家・児童文学作家

石井桃子の文業は、①外国児童文学の翻訳、②日本児童文学の理論家、③児童文学の実作者、と多岐に亙る。ここではさらに、④児童文学図書の編集者、という石井の領域をこれらに加えておきたい。

私が、どうして子どもの図書室などをはじめたかといえば、私自身、「児童文学」といわれるものを書こうとしたり、訳したり、子どもの本の編集をしたりしながら、直接、それを読むじっさいの子どもとの交渉が少ないため、仕事に支障をきたすことが多かったのです。（「子どもの図書館」[註9] 石井桃子）（一九六五年）

児童図書の「編集」の「仕事」が全ての始まりであったのだ。⑤子ども図書館・〈かつら文庫〉の開設も、編集の理想を追い、編集技量を高めるための方途であった。

7　翻訳家

石井桃子の翻訳では、ミルン（Milne, Alan Alexander）「熊のプーさん」（Winnie-the-Pooh, 1926）（四〇年邦訳）の、あるいは、ファージョン（Farjeon, Eleanor）「麦と王さま」（五九年邦訳）の邦訳がよく知られる。また、「イギリス童話のもつ固有な伝統ある物質を日本語の世界に紹介し」[註10]たという観点からも、その翻訳は高く評価されている。これらの仕事は、凡そ一九三七年頃から始まったとされる。

絵本の領域では、ベアトリクス・ポター（Potter, Beatrix）「ピーター・ラビットのおはなし」（The tale of Peter Rabbit, 1902）、ディック・ブルーナ（Bruna, Dick）「子どもがはじめてであう本」シリーズの翻訳が著名。一般児童図書の領域では、ガーネット（Garnett, Eve）「ふくろ小路一番地」（The Family from One End Street and Some of Their Adventures, 1937）、ギラム「カラスのだんなのおよめとり」、グレアム（Grahame, Kenneth）「楽しい川べ」（The Wind in the Willows, 1908）、トウェイン（Twain, Mark）「トム・ソーヤーの冒険」（The Adventures of Tom Sawyer, 1876）、ドッジ（Dodge, Mary Mapes）「ハンス・ブリンカー」（Hans Brinker : or the Silver Skates, 1865）、ハムズン（Hamsun, Marie）「小さな牛追い」（A Norwegian Farm, 1933）、ルイス（Lewis, Hilda Winifred）「とぶ船」（The Ship hat lew, 1939）が著名。「エリナー・ファージョン作品集」という大部の翻訳もある。

児童文学に関する専門書の翻訳として、コルウェル（Colwell, Eileen Hilda）「子どもと本の世界に生きて」（How I Became a Librarian, 1956）、リリアン・スミス（Smith, Lillian Helena）「児童文学論」（The Unreluctant Years : A Critical Approach to Children's, 1953）（六四年・共訳）、ルイス（Lewis, Clive Staples）「子どもの本の書きかた三つ」がある。スミス「児童文学論」はもともと、児童文学の理論書、啓蒙書として国際的な知名度のあった書である。この「児童文学論」（六四年邦訳）が翻訳・紹介されたことによって、スミス理論は、戦後の日本の児童文学研究、読書指導の実践に大きな影響を与えることになった。

8　理論家

8・1「異質なもの」としての日本児童文学

世界の児童文学のなかで、日本の児童文学は、まったく独特、異質なものです。世界的な児童文学の基準――子どもの文学はおもしろく、はっきりわかりやすくということは、ここでは通用しません。また、日本の児童文学批評も、印象的、感覚的、抽象的で、なかなか理解しにくいものです。（「子どもと文学」）

この揚言は、「子どもと文学」の全てを規定する。石井らは同書で、日本の子どもたちが手に取る本について、大人がそれを、もっと切実に考える必要があるように思うと言っている。たとえ作家が想像力をほしいままにして作品を書くとしても、相手が子どもである場合には、徒に難解で抽象的にならぬようにというのだ。石井は、「体験と創造」と題された座談会でも、「日本では高踏的な児童文学というものが子どもには受け取りにくいかということを、疑問に思うようになった」[註11]と発言している。又、描写のあり方にも提言を行う。

日本文学では、情感の袋小路にさそいこむようなものが少なくありません。情緒や心理的な説明（が過多で、一方では）事

件や行動は重んじてこなかった（『子どもと文学』）

情緒的心理描写に反対する意見は、随筆「子どもにうったえる文章」[註12]にもある。石井はそこで、「心情的な形容詞」が「多い」文章は、「子どもの心を打つ力が弱」く、「情景描写も物語の進行をとどめてしまうから」、「子どもをたいくつさせる」要素となるとする。

8・2 「児童文学論」の影響

スミス著『児童文学論』の「（訳者）あとがき」において石井らは、「これまでの日本の児童文学批評が、客観的な、信服するにたる基準によって、子どもたちのよい本を選び、すすめるものでないことを不満に思っていました。そしてまた、一面には、厳密な批評に値する作品がまれであることも、認めなければな[註13]らなかったと書いている。将来の子どものために、優れた児童文学作品を手渡すにはどうしたらよいのか。そのための指針を与えてくれるのが、スミス「児童文学論」であるというのだ。「（訳者）あとがき」は同書を次のように言う。

（「児童文学論」は、）子どものための文学の質的な基準とは何かを、純粋に、具体的に、全力をかたむけて説きあかしている、もっとも本質的な概論である。

しかし、スミス自身は、同書本文中において、実は次のように語っていたのであった。

よい本をつまらない本と見わけ（るには、）敏感な感受性と判断力とを必要とする。私たちの読んでいるものがいいか悪いかという判断を、狂いなく教えてくれるような方式というものは、**ない**。不朽の価値がある極めつきの本に親しみ、理解することが、子どものための新しい作品のねうちをはかる場合、いつでも基準になる判断と感性の土台を与えてくれるのである。[註14]

むろん、王道は「ない」とは言い条、スミスは、少し具体的には次のように語っている。スミスによれば、「ストーリーがいかに簡潔に語られているか」が肝要であり、「必要なところをのぞいては、細部は何も描かれない」のが理想である。物語は「簡潔さ、単純さ、力強さを具え」、「物語が単純に始まり、簡潔に核心に迫り、ストーリーの動きに関係あることだけを述べて、すみやかに、しかも決定的に終りが来る、ということ」[註15]が求められる。

石井らの「子どもと文学」は、このスミス理論を忠実に追っている。「子どもと文学」は、「子どもの文学として、たいせつな、基本的な要素を含んでいると見られる〝昔話〟を例にとって、子どもにとって理想の作品では、「一本の線の上を話の筋が運ばれていき」、「はじまりの部分」は、「最小限に必要なことばを使って」、「必要なものすべて――時間、場所、登場人物、テーマ、出来事の発端――が紹介され」、「展開部では」、「むだのない出来事と、効果的な会話、満足のできる解決が与えられ」、「しめくくりの部分」では、「すっきりした結末」が図られる、と結論する。[註16]師資の相承は右に明瞭である。

石井のいわば第二の啓蒙書である『子どもの読書の導きかた』[註17]にも、「おもしろいお話の条件」とは、「かんたん明りょう」ということに尽き、そのような作品は、「いらない横道にそれたり、たいくつなお説教がはじまったりしません」、とある。

8・3 「子どもと文学」批判のいろいろ

「子どもと文学」の主張する価値の判断基準に対しては、子どもにとって「おもしろい」かどうかだけが問題にされている、とする批判が当然出てくることになった。いかにも説得力があるように見えるこの基準も、その実地の根拠はということになると、子どもに対して実際に本を読み聞かせた時の反応に、実は限定されているではないかというのだ。

古田足日「児童文学研究の課題と方法 ――『子どもと文学』を中心に」[註18]は、「子どもと文学」の問題点は、「作者の内部にひそむ児童文学的主体とでもいうものを考えないところにある」という。児童文学作家は、自身が大人であるのに、「子どものことば、子どものイメージ、子どもの論理で表現し、認識を深めていくということは実にふしぎなことだ」と古田は感じ、実作者を、「このふしぎなしごとにかり立てていくものは何なのか」を考えねばならないとする。つまり、「基準を立てて、作者を外から強制することはできぬ」というのだ。

これは、子どもを本位に児童文学を考えるか、創作主体の大人を本位に考えるかの違いであろう。石井はスミス理論に親炙する。そのスミスは自著「児童文学論」に、アザール（Hazard, Paul）を引用する。「（子どもは、）人生の幸福の最もよい分け前をまず受けとるものなのに、この幸福でゆたかな子ども時代の年月を、おとなたちは、踏みにじろうとする」（Books, Children and Men, 1944）。スミスは、これに共鳴し、「その本が子どもたちのためのものであるならば、その本の最後の判決をくだすのは子どもたちである」、あるいは、「子どもは、不朽のねうちのある本にだけ、成長に必要な材料を見いだすことができる」と語る。

これらに対し、「児童文学の中で作者自身が見捨てられている」、「作者はひたすら、子どものためにだけ書いているのであり、自分は粉骨砕身」（「児童文学時評」）、と言うのが三木卓[註19]。三木は次のように続ける。「そんなことが許されるだろうか。勿論許されるわけはない。作者は第一義的に自分のために書くのであり、それは自分自身書くことが必要だから書くのである」。三木のこの主張は、以下の論旨と併せて、「子どもと文学」論争におけるジンテーゼとなっている。

（人と人、子どもと大人）両者の関係は一方から一方への支配関係を連想させるようなものではなく、根本的にひらかれた、自由で平等な関係があるだけなのである。児童文学という名を冠してはいるが、これは、つまるところ文学の形式に他ならず、それを支えているものは、飽くことのないこの世界＝現実の深部の解明への意志であり、それを再構成しようとする想像力である。それらのものが幼年期の新鮮な、輝かしい感受性に支えられて、はじめて児童文学は成立する。

しかし、石井説理解のためには、次の石井自身の言を補足として掲げておく必要があろう。石井は『子どもの読書の導き方』の「おわりに」において、「子どものための良書は、おとなの考えだけではできません。また子どもの興味だけにかたよっても、できません。どちらになっても、子どもの本のただしい価値は失われそうです。長いあいだにわたる子どもの反応とおとなの批評眼があわさって、子どもの良書が普及されていくように思います」[註20]と述べている。石井の平衡感覚を示すものであろう。

8・4　反・思想という思想

「子どもと文学」の思索の特徴は、その〝無思想性〟にあるとの批判もある。「たいくつなお説教（イデオロギー）がはじまったりし」ない、「かんたん」で「おもしろい」本を予め選んでおいて、その中でも、〝予想しておいた反応が子どもに如実に現われる本が、すなわち良い本〟という公理では、あまりに恣意的に過ぎよう。神宮輝夫は、「新しいステロタイプのおそれ」[註21]（一九六〇年）において、石井のこのテーゼを、「物さしをもっていて、それで作品をはかったという感じ」、「いかにも機械的だ」と論難する。

筆者（石井）は古典的価値を時代の変遷にかかわらずかわらぬ価値と注釈しているが、これには作品の生まれる時代の政治、社会状勢からの離脱が感じられる。これは前の部（第Ⅰ部）の作家論で、だれも具体的になにを書くべきか、どういう思想をわれわれは持つかなどを明確にしなかったところから生まれる感じである。（「新しいステロタイプのおそれ」神宮輝夫）

鳥越信も「日本児童文学案内」[註22]（六三年）の中で、「技術的な無思想の思想にのめり込んでいく危険性をはらんでいる」としている。

砂田宏はのちに、石井テーゼに対する三つの批判を行っている（「『子どもと文学』の〈おもしろさ〉の変遷」[註23]）。一つには、「子どもと文学」が刊行された一九六〇年という年は本来、日本の戦後史の岐路となった歴史の節目であるのに、それに対する危機感が全く見られないこと。二つには、同書において、児童文学が対象とする年齢が一貫していないこと、しかも、「この時期すでに、欧米の児童文学では子ども観が転換する兆をみせていたのに、その新しい動きについての言及がない」こと。三つには、同書の言う「世界の児童文学」が、欧米の児童文学だけを指していて、アジアを含めて発展途上国のそれを視野に入れていないこと。

8・5　スミス理論の祖述

石井の思索は、繰り返すならば、スミス理論を下敷きとしている。そのスミスの立脚点は、第二次世界大戦中にアメリカで興ったプラグマティズム哲学にあると言われている。[註24] そのスミスからの影響の中でも、特に相同性が顕著なのは、〈イデオロギー不用〉のテーゼの部分である。それは広い範囲で一致する。

スミスは、直接子どもたちのために書かれた、今も生き永らえている、イギリス最初の本は、ゴールドスミス（Goldsmith, Oliver）の「靴ふたつさん」（Goody Two Shoes）であるとする。そして、この本の長寿の理由を、道義的な目的よりも物語と諸人物とを大事にした作家がそれを書いたからだとしている。以下、スミスの言説から引く。

児童文学の歴史をみると、それぞれの時代の子どもの本に、その時代のもっとも悪い特徴が強く出ていることがわかる。私たちは、時代的な感心をもたれたあることがらが非常に支配的になって、どんな本を子どもに与えるかということにまで影響を与えた例を知っている。現代では、人種的偏見にたいする感心がめざめ、社会不正に気づいた結果、アン・カロル・ムア（Moor, Ann Carroll）が「背景が多すぎ、問題が多すぎて、生命を失った物語」と呼んだもので、子どもの本をいっぱいにしがちである。しかも、こういう本が、おとなの側からは喝采されがちである。それは、その本のテーマが子ども本来の興味をひ

くというよりも、社会的問題にたいするおとなの真剣な関心を反映しているからである。それにまた、そういう本の文学としての永続的な真価も、注意深く吟味されていない。（中略）子どものために二流の物語を書く作家たちは、社会改良のテーマを選ぶことが多すぎる。たぶんそれは、子どもの本というものが、おとなによって書かれるからであり、おとなとしての自分の関心をひく問題を説くためにストーリーを書くことに熱心（だからである。）（「児童文学論」スミス）[註25]

一方、石井の言説。

悲惨な貧乏状態を克明に描写したものや、社会の不平等をなじったものなども、いつの時代にも書かれています。批評家や、一般の大人は、非常な感銘を受けて、これを子どもたちに買って与えました。（「子どもと文学」石井桃子）[註26]

石井によれば、「そうした物語は、ストーリー性のない観念的な読物となっていることが多く、どうしても子どもたちをひきつけることはできず」ないということになる。イデオロギーの背景のある、社会的主題を取り上げること自体、作品の生命を縮めるとともに、人生経験の浅い子ども達には有害、このような言が、些かの躊躇もなく語られるのは、右に見たように、祖述されたスミス理論の後ろ盾の故である。そして、「子どもと文学」理論は、論理の枝を切り詰めたことで得られた単線的な明快性を理由に、日本のその後の図書館・読書運動に多大な影響を及ぼすことになった。

9　児童文庫

一九五八年、石井桃子は、自宅の前庭に「かつら文庫」を開設する。

最近、アメリカからヨーロッパへ、児童本の視察にいった若い婦人の旅行記に、アメリカから子ども図書館のない国々へはいることは、暗い部屋へはいっていくようだということがでていた。早く日本でも、このまだ暗い、寒い部屋をあかるくしなければならない。（「子供のためのブックリスト、ふたつ」）[註27]（五〇年）

児童文学作品が、「どんなふうに書いてあれば、子どもにおもしろいかということがわか」（「子どもの図書館」石井桃子）りたいということが、先述のように、開設の直接の理由である。しかし、「かつら文庫」は、地域の子ども達には大きな福音になった。

「かつら文庫」のためには、私の家で日あたりも、出はいりの便も一ばんいい部屋を選びました。家の東にあたる道路から、「かつら文庫」の名まえのいわれである、大きな月桂樹の下を通ってはいってくると、とっつきの部屋が、それでした。（「子どもの図書館」）[註28]（六五年）

石井の試みは、「暗く寒い部屋」に居た子どもたちを、「あかるい」場所へ連れ出すことになった。石井自身もここで得られた経験を、「子どもの図書館」[註29]（六五年）にまとめた。

石井『子どもの読書の導き方』には、「子どもたちが、自由に本に親しめる場所、自由に読みたい本の借りられる場所」の必要性が語られている。子どもにとって、本との出会いは、長く学校図書館に限られていた。しかし、学校図書館には、学校教育に特有のきまりがある。読書の感想を無理やり言わせたり、感想文を書かせたりする大人がいる。本は遅かれはやかれ、子どもの苦痛の種になる。

「かつら文庫」は次第に、公教育の読書指導とは別箇に、子どもを本に親しませ、読書の習慣をつけさせるような場所になっていった。

10　児童文学創作家

児童文学の実作者として、石井の代表作は普通、「ノンちゃん雲に乗る」ということになっている。しかし、執筆作品は、他にもたくさんある。年代順にそれを列挙する。五六年の「やまのこどもたち」、五七年「山のトムさん」、五九年「やまのたけちゃん」「迷子の天使」、六三年「ちいさなねこ」「三月ひなの月」、六四年「ようちゃんともぐら」、六五年「くいしんぼうのはなこさん」、六八年「ありこのおつかい」。

11　石井桃子と郷土　――　二〇世紀初頭の浦和

石井桃子は、一九〇七年三月一〇日、現・埼玉県浦和市に生まれた。父親は小学校教員を経て浦和商業銀行支配人。祖父は、金物商であった。八人兄弟の下から二番目。兄、弟の一人ずつが早世している。石井は後に、川本三郎との対談で次のように言っている。

中山道沿いの小さな宿場町で、ほとんど一かわぐらいしか家は並んでなかったんです。ある時期、宿（しゅく）の入口の大きなお休み処だったそうで、浦和のいちばん北のはずれでした。大名の行列が大宮のほうからやってきますと、浦和が天領だったので、本陣の人たちが、私の家のほうまで大名を迎えに出ていたそうです。（「本との出会い・人との出会い」[註30]）（二〇〇〇年）

石井には「幼ものがたり」という自伝がある。宿場の面影の残る二〇世紀初頭の浦和・常盤町、その中仙道沿いの家と家族、そして街道を去来する人々を「私」が回想する作品である。

写真１　旧中仙道浦和宿の石井桃子生家附近
（桃子の幼時、ちょんまげの男性・荷馬車・人力車などが往来した。）

一九二八年、日本女子大学英文科卒業。二九年から三二年まで、文芸春秋社に勤務。三四年から三六年まで、山本有三のもとで、新潮社の「日本少国民文庫」を編集。同「文庫」は、吉野源三郎「君たちはどう生きるか」、山本有三「心に太陽をもて」を含む叢書。戦中には、「ノンちゃん雲に乗る」を執筆。四五年から五〇年まで疎開先の宮城県栗原郡鶯沢町において農業に従事、栗駒山麓に酪農協同組合「ノンちゃん牧場」を開設。その後、上京、岩波書店に勤務。

「ノンちゃん雲に乗る」は、国民的児童文学作品と呼び得るような知名度を得た。しかしこの作品に対しては、「雲の世界で雲のおじいさんの顔色をうかがいながら」、「やっぱりいい子になって帰ってくる」「ノンちゃん」に「うんざり」して、「たまらなくきゅうくつに思われた」[註31]という意見も一方にはあった。

そもそも、ここには、成長していく一人の少女は存在するけれど、発展していく少女の姿は、存在しないのである。ノンちゃんの身につけた人間的価値は、常に、大人に見守られ、包

まれているままで、一度も検証されないということである。

（上野瞭『戦後児童文学論』）（六七年）

ここでも、石井に対する弁護が必要かもしれぬ。

（執筆時の、戦中には、）私の心の欲する種類のものは、国や世間の目から見れば、いけないことになっていたので、私は屈託しきっていた。……（「私の一冊・ノンちゃん雲に乗る」石井桃子[註32]（六八年）

出版の当ても凡そなかった「ノンちゃん雲に乗る」は、戦争の空の下、石井の友人達、つまりは大人たちの間を、回覧されていた作品であったのだ。

『ノンちゃん雲に乗る』にしても、子どもの本なんていう意識はまったくなかったんですよ。ただあのころ、うっ屈していた友だちの気もちを慰められればと思ったんです。

（「岩波少年文庫」創刊のころ」石井桃子[註33]（八〇年）

写真２　今も残る「鉄道線路の向こうの三角稲荷」
（石井桃子は幼時、雛人形を「納めに」通った。）

「ノンちゃん雲に乗る」の知名度に比して、先述の自伝「幼ものがたり」[註34]（八一年）の方は、いまだ相応しい評価を受けずにいる。本来なら日本の児童文学の中で高く位置付けられるべきであり、後世には必ず石井の最高傑作と評価されるに相違なく、また中野重治の自伝的作品「梨の花」にすら遜色ないとする意見もある。啓蒙家・理論家としての石井が「専門家として自らかくあるべしと考える児童文学のわくの外に傑作をのこしたのは皮肉」[註35]という意見もある。

「幼ものがたり」には、周囲に対し生き生きと反応する子どもの「生理のゆたかさ」が失われずに再現されている。さらに、大人になって幼時を思い返しながら、その過去の自分とまわりの環境とを「同じ比重」で観察し直し描写する「成熟した人間の目」がある。読者は、「石井の中には、幼年時代を現在形で生きる子どもがちゃんと生きて、呼吸していたのだった」ことを再認識するのである。児童文学理論家としての社会的使命から「解放されて」、「本然の姿をとりもどしたひとりの女性を見」て、石井の息詰まる文業をみつめてきた者は、自分自身もまた第三者として「快く解放されていくのを覚える」[註36]のである。

「幼ものがたり」を仔細に眺めればその存在に心づく、ユーモア、そして静かな悲哀は、同書から二ヶ月遅れて出版された『児童文学の旅』[註37]（八一年）、リリアン・スミスらの先達や、海の向うの友人達との若かりし日の出会いと、老いた彼女らとの別れが描かれる、いわば思い出語りの本にも滲み出ることになった。

石井自らが直裁に自己を語ることで、読者の心を愁意と涕涙で満たした右の二作は、石井が理論家として提唱した子どもの文学の理想、すなわち〈ストーリー性があり〉、〈おもしろく〉、〈明瞭で〉〈分りやすい〉という条件からは隔たった、しかもその理論を裏切ってむしろ奥深く、また、ヒューマンなものの豊かな流露がある。『子ど

もの読書の導きかた』、『子どもの図書館』、さらには、『子どもと文学』といった児童文学啓蒙書、またその理論の創作実践である「くいしんぼうのはなこさん」、「ありこのおつかい」などの作品世界が、「整然として、実にクール」[註38]であるのと、これは対照的である。読者は、孰(いず)れの石井桃子を選ぶのか。

石井は社会の中で自分に今、何が要請されているかをまず考えるということが習い性のようになってしまっていた。（「使命感と自己解放のあいだで――石井桃子論」清水真砂子）[註39]

編集者・翻訳家・理論家・児童文庫運営家・児童文学実作者としての石井が社会に向けてみせる態度には、時代を切り拓いて行く者がひとしなみに受け入れなければならぬ宿命が宿っている。それは、詳細に亙る文学的ニュアンスを時に一旦留保してでも、論理・体系化のために〈対象を一元的に捉える〉という便宜・散文的な作業を自らに課そうとする啓蒙者としての自己限定的な宿命・役割ではなかったか。社会的要請と、個人の資質――自伝「幼ものがたり」に認められる上澄みのような情意の滴り――とのそのような相克は、矛盾の総和としての人間本来の実存を、時としてより拡大して見せることがある。

【註】

（1）佐吉多万能　津尓乎流布禰之　可是乎伊多美　都奈波多由登毛　許登奈多延曾禰

「和名抄(わみょうしょう)」に、「埼玉郡埼玉郷」とある。埼玉県の東北部、行田市の東南部埼玉一帯。埼玉の津は、旧・利根川に注いでいた旧・荒川に沿う船着場。

（四〇）

（2）『埼玉現代文学事典』（増補改訂版）埼玉県高等学校国語科教育研究会　一九九九年一一月

（3）「児童文学」　鳥越信　『日本児童文学大事典』第二巻　大阪国際児童文学館 編　一九九三年一〇月

（4）『現代児童文学論』　古田足日　くろしお出版　一九五九年九月

（5）『子どもと文学』　石井桃子 他　中央公論社　一九六〇年四月

（6）「少年の理想主義について」　佐藤忠男　「思想の科学」一九五九年三月

（7）「子どもと読書」　石井桃子　「図書」一九六五年八月

（8）『近代日本児童文学史研究』　鳥越信　おうふう　一九九四年一一月

（9）『子どもの図書館』　石井桃子　岩波書店　一九六五年五月

（10）「石井桃子」　与田準一　「現代児童文学事典」「解釈と鑑賞」一九六二年一一月

（11）「児童文学における体験と創造」　石井桃子 他　「日本児童文学」一九六一年一月　みかも書房

（12）「子どもにうったえる文章」　石井桃子　『現代作文講座』3〈作文の条件〉　明治書院　一九七七年一月

（13）「（訳者）あとがき」『児童文学論』　リリアン・H・スミス　岩波書店　一九六四年四月

（14）『児童文学論』　リリアン・H・スミス　岩波書店　一九六四年四月

（15）『児童文学論』　リリアン・H・スミス　岩波書店　一九六四年四月

（16）『子どもと文学』　石井桃子 他　中央公論社　一九六〇年四月

（17）『子どもの読書の導きかた』　石井桃子　国土社　一九六〇年六月

（18）「児童文学研究の課題と方法　―「子どもと文学」を中心に―」　古田足日　「日本文学」一九六七年五月

（19）「児童文学時評」　三木卓　「学校図書館」一九七二年一二月

（20）『子どもの読書の導きかた』　石井桃子　国土社　一九六〇年六月

（21）「新らしいステロタイプのおそれ」　新宮輝夫　「日本児童文学」一九六〇

年七月　日本児童文学者協会
(22)『日本児童文学案内』　鳥越信　理論社　一九六三年
(23)「『子どもと文学』の〈おもしろさ〉の変遷 ――渡辺茂男の軌跡を追って」　砂田弘「日本児童文学」一九八四年六月　偕成社
(24)『近代日本児童文学史研究』　鳥越信　おうふう　一九九四年一一月
(25)『児童文学論』　リリアン・H・スミス　岩波書店　一九六四年四月
(26)『子どもと文学』　石井桃子 他　中央公論社　一九六〇年四月
(27)「子どものためのブックリスト、ふたつ」　石井桃子「図書」一九五〇年一二月
(28)『子どもの図書館』　石井桃子　岩波書店　一九六五年五月
(29)『子どもの図書館』　石井桃子　岩波書店　一九六五年五月
(30)「女がつくる文化」《本との出会い・人との出会い》〈戦前・戦中・戦後初期〉　石井桃子『近代日本文化論』８《女の文化》　青木保 他編　岩波書店　二〇〇〇年二月
(31)「石井桃子」　清水真砂子『講座日本児童文学』第八巻《日本の児童文学作家　3》　明治書院　一九七三年一〇月
(32)「私の一冊・ノンちゃん雲に乗る」　石井桃子「日本児童文学」一九六八年二月　河出書房
(33)「岩波少年文庫」創刊のころ」　石井桃子「図書」一九八〇年一〇月
(34)「幼なものがたり」　石井桃子「子どもの館」一九七七年四月～七八年五月
『幼ものがたり』　福音館（日曜日文庫）一九八一年一月
(35)「使命感と自己解放のあいだで　石井桃子論」　清水真砂子『本の現在』大和書房　一九八四年九月
(36)「使命感と自己解放のあいだで　石井桃子論」　清水真砂子『本の現在』大和書房　一九八四年九月
(37)『児童文学の旅』　石井桃子　岩波書店　一九八一年三月
(38)「使命感と自己解放のあいだで　石井桃子論」　清水真砂子『本の現在』大和書房　一九八四年九月
(39)「使命感と自己解放のあいだで　石井桃子論」　清水真砂子『本の現在』大和書房　一九八四年九月

【追記】　石井桃子生誕の地には現在、石井氏の後裔の方が在住する。現地研究調査（二〇〇四年九月二一日）に際し、桃子氏の甥に当られる方からお話を伺うことができた。石井桃子「幼ものがたり」に、「私は、ちょっとした用事をわざわざこしらえて、浦和の甥のところに出かけた」との記述があったことが想起される。氏によれば、桃子氏は現在、「かつら文庫」のある東京・杉並の自宅で静養の日々を送っておられるとのことであった。

Modern Culture in Saitama prefecture

― development of the children's literature, Ishi Momoko's work ―

KONO, Motoki

埼玉（さきたま）の文化は、幸魂（さきたま）の字義通り、豊かな自然と、民（たみ）という富に恵まれ、文学の豊穣も万葉の昔より約束されてきた。下っては、その近代文学もおもむろに歴史を重ねつつあるが、ここでは、埼玉の児童文学の展開に着目した。浦和出身の石井桃子は、日本のみならず国際的な児童文学者として知られるが、その多様な文業（児童文学作家・理論家・翻訳家・児童図書館組織者・編集者）の検証を行った。自伝「幼ものがたり」に顕現する埼玉人としての石井、さらには、リリアン・H・スミス（カナダ）の児童文学理論を受容した国際人としての石井、その重層的個性から、埼玉の郷土の特質を探った。

キーワード：埼玉文化、児童文学、児童図書館、石井桃子、リリアン・ヘレナ・スミス
Key words ：Culture in Saitama prefecture, Children's literature, Children's library, ISHII, Momoko, SMITH, Lillian Helena